

## 房総きのこ今昔

### － 大正時代のハツタケ狩り －

吹春俊光・内田龍哉（千葉県立中央博物館）  
・吹春公子



房総では、現在でも年配の方々を中心に、ハツタケが食用きのことして特に好まれています。その背景として、ハツタケと共生するマツが江戸時代頃から広く房総に「栽培」といえるほど植栽され、人為的に管理された二次林としての若いマツ林が、数百年にわたり常に房総の人たちの周囲に存在していたこと、それ故に若いマツ林に発生するハツタケは身近な食用のきのこだったこと等が、その理由のようです（吹春、2021a, b）。

今回ご紹介するのは、『萬朝報（よろずちょうほう）』という新聞の日刊3面に常時掲載された「房総地方重要記事」（房総版）、そして『成田鉄道案内』というガイドブックに掲載された大正時代のハツタケ狩りの案内です。

『萬朝報』は、作家でジャーナリストでもあった黒岩涙香によって明治25（1892）年に創刊され、昭和15（1940）年まで発行された日刊新聞で、千葉県立中央博物館に、房総版が掲載されている現物が保存されています。本号（千葉菌類談話会通信37号）の別の記事では、大正8（1919）年の萬朝報掲載のハツタケ記事をご紹介しましたが、ここでは大正9（1920）年の4件の記事の紹介です。

記事その1-1、その1-2（図1-1、図1-2）は、千葉県富津市にある標高309mの鬼冨山（きなだやま）という、現在のマザー牧場がある場所を舞台に、この地への植林事業の視察・宣伝の人集めのため、10月3日（日曜）にハツタケ狩りのイベントが計画されたというものとその続報です。

記事その2（図2）は、ハツタケの名産地である千葉県東葛飾郡千代田豊四季村（現在の千葉県柏市豊四季）のマツ林で、9月26日（日曜）にハツタケ狩りのグループが見られたこと、そして豊四季の次にハツタケ産地として有名な千葉県東葛飾郡土村今谷新田（現在の柏市今谷上町）では、10月3日（日曜）に若者グループによるハツタケ目的の茸狩が行われる、というものです。

記事その3-1、その3-2（図3-1、図3-2）は、10月10日に三里塚の宮内省下総御料牧場内（現在の成田市三里塚）で皇族方が茸狩をされるという記事とその続報です。

記事その4（図4）は、千葉県印旛郡遠山村山之作（現在の千葉県成田市山之作）付近で採った芝茸によるきのこ中毒の訃報です。

『成田鉄道案内』（図5）は、成田鉄道沿線の名所旧跡を紹介するガイドブックですが、沿線の地勢・史跡・産業・陸運と水運などについて概説したあと「沿線の茸狩と狩猟」が収められています。七栄村（現在の千葉県富里市）や、旧成田鉄道多古線の三里塚駅（現在の千葉県成田市本三里塚）付近にマツ林が広がり、「初茸の発生夥し」、「到處に好適地が散在」というハツタケ産地だったことが紹介されています。

これらの新聞記事や鉄道ガイドブックは、大正時代に、房総の北部や中部で、ハツタケが沢山とれる若いマツ林が広く見られたこと、ハツタケ狩りが房総で暮らす人たちの娯楽の一つであり、また若者にとっても魅力的な行事であったこと等を示しています。

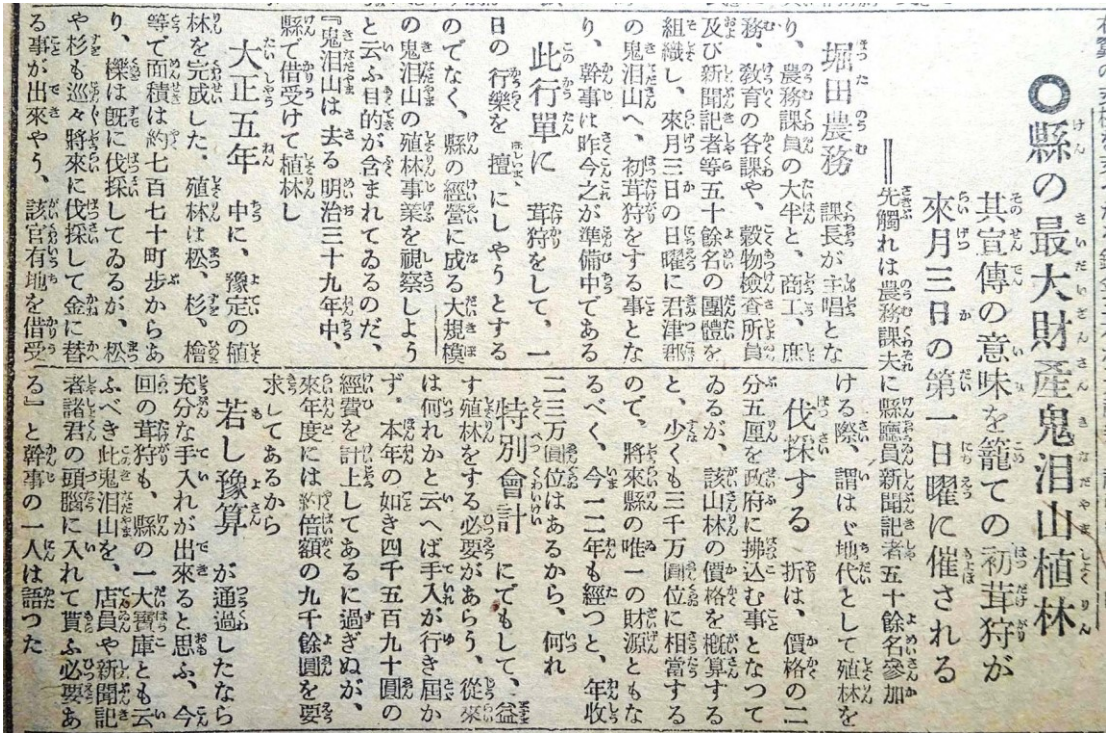


図1-1

●記事 (その1-1)

【萬朝報】大正9 (1920) 年9月25日 (土) 房総版 日刊3面 (図1-1)

○縣の最大財産鬼泪山植林

其宣傳の意味を籠ての初茸狩が來月三日の第一日曜に催される

＝先觸れは農務課夫に縣廳員新聞記者五十餘名參加

堀田農務 課長が主唱となり、農務課員の大半と、商工、庶務、教育の各課や、穀物検査所員及び新聞記者等五十餘名の團體を組織し、來月三日の日曜に君津郡の鬼泪山へ、初茸狩をする事となり、幹事は昨今之が準備中である

此行單に 茸狩をして、一日の行樂を擅にしやうとするのではなく、縣の經營に成る大規模の鬼泪山の植林事業を視察しようとする目的が含まれてゐるのだ、『鬼泪山は去る明治三十九年中、縣で借受けて植林し

大正五年 中に、豫定の植林を完成した、

植林は松、杉、檜等で面積は約七百七十町歩からあり、櫟は既に伐採してゐるが、松や杉も巡々將來に伐採して金に替る事が出來やう、該官有地を借受ける際、謂はゞ地代として植林を

伐採する 折は、價格の二分五厘を政府に拂込む事となつてゐるが、該山林の價格を概算すると、少くも三千万圓位に相當するので、將來縣の唯一の財源ともなるべく、今一二年も經つと、年収二三万圓位はあるから、何れ

特別會計 にでもして、益す植林する必要があるらう、從來は何れかと云へば手入が行き届かず、本年の如き四千五百九十圓の經費を計上してあるに過ぎぬが、來年度には約倍額の九千餘圓を要求してあるから

若し豫算 が通過したならば充分な手入れが出來ると思ふ、今回の茸狩も、縣の一大寶庫とも云ふべき此鬼泪山を、店員や新聞記者諸君の頭腦に入れて貰ふ必要がある』と幹事の一人は語つた



# ○秋晴れの一昨三日

## 鬼泪山の視察を兼ねて

### 縣官と記者一行の茸狩り

——一同成金氣分に浸りつゝ、阿野技師から斯山に於ける縣殖林事業の概況を聴く——

堀田農務課長、青山穀物検査所長加藤水産技師以下三十餘名の縣官に田中央、狩野朝日、彩嵐子及記者とが交つて、秋晴れの三日、縣の基本林鬼泪山に、視察を兼ねての茸狩りを催した。一行の佐貫驛に着いたのは午前八時何分、愈よ鬼泪山の内懐に這入つて茸狩りを始めたのは二時間後の十時半頃であつた。夫から銘々採集に取りかゝつて、且採り且進みつ、鹿野山の登山路に出で、數年前迄茶店のあつたといふ中休みと云ふ所へ辿り着いて折しも來合せた佐貫町役場員の齎らした麥酒の握飯に飢渴を醫した何分馴れぬ山路に記者等十餘名は第一の上山へと迷ひ込んで荆棘を分け小篠を踏しだきつゝ散々彷徨いたが、お蔭で獲物は多かつた。此行河野技師、千葉技手、大野技手夫妻並に佐貫町長以下役場吏員、小學校女生徒有志諸嬢の御厚意を感謝する。以下一同成金氣分に浸りつゝ、河野技師から聽いた談話の要領を記して、鬼泪山を紹介しやう(一記者)

堀田農務課長、青山穀物検査所長加藤水産技師以下三十餘名の縣官に田中央、狩野朝日、彩嵐子及記者とが交つて、秋晴れの三日、縣の基本林鬼泪山に、視察を兼ねての茸狩りを催した。一行の佐貫驛に着いたのは午前八時何分、愈よ鬼泪山の内懐に這入つて茸狩りを始めたのは二時間後の十時半頃であつた。夫から銘々採集に取りかゝつて、且採り且進みつ、鹿野山の登山路に出で、數年前迄茶店のあつたといふ中休みと云ふ所へ辿り着いて折しも來合せた佐貫町役場員の齎らした麥酒の握飯に飢渴を醫した何分馴れぬ山路に記者等十餘名は第一の上山へと迷ひ込んで荆棘を分け小篠を踏しだきつゝ散々彷徨いたが、お蔭で獲物は多かつた。此行河野技師、千葉技手、大野技手夫妻並に佐貫町長以下役場吏員、小學校女生徒有志諸嬢の御厚意を感謝する。以下一同成金氣分に浸りつゝ、河野技師から聽いた談話の要領を記して、鬼泪山を紹介しやう(一記者)

鬼泪山 は君津郡湊町大字櫻

井と、小絲村大字耕作の二部落に跨つてゐ、面積七百七十八町四反餘あるが、現在の殖林設定面積は其より二十五町歩許り少い、各種殖林面積と數量を示すと、杉が三百七十一町二反餘、百六十七万五千六百、栢百八十七町六反餘八十四万四千五百九十二本、松百五十一町四反、六十八万三千三百二十一本、櫟

七町餘 三万六千六百五十四本  
合計七百七十七町三反餘歩の三百二十万八千八百八十三本である、又今日迄に賣した經費を挙げると、明治三十九年度から大正七年度迄の合計五万五千二百二十九圓(一町歩七十圓)次の八年度は千九百九十七圓であつた、尙其收入を示すと、昨年迄は主として他で僅か九百一

本年度からは大正八十四年度に至る七十五年度間に、各種殖林の主間伐收入其他を合して七百九十五万八千六百四十圓、一町歩當り一万九千九百四十圓といふ巨額の收入を擧げることが出来る、之を同年間の支出十八万七千四百五十九圓、一町歩當り二百六十一圓に較べると、差引勘定實に七百七十七万五千八百八十七圓の利益で、山林の實價は二千八百万圓に及ぶと云ふこの收入の中、縣から

國庫へ二分五厘納付する事となつてゐるが、如上の計算通りに行くと、併後二三十年も経つと縣の得る収益は莫大なものであらう、因に伐採期は杉六十年、扁栢七十年、赤松四十年、櫟初回十二年、二回以後八年であると云ふ、

図1-2

●記事 (その1-2)  
【萬朝報】大正9 (1920) 年10月5日 (火) 房総版 日刊3面 (図1-2)

○秋晴れの一昨三日 鬼泪山の視察を兼ねて縣官と記者一行の茸狩り  
——一同成金氣分に浸りつゝ、阿野技師から斯山に於ける縣殖林事業の概況を聴く——  
堀田農務課長、青山穀物検査所長加藤水産技師以下三十餘名の縣官に田中央、狩野朝

日、彩嵐子及記者とが交つて、秋晴れの三日、縣の基本林鬼泪山に、視察を兼ねての茸狩りを催した、一行の佐貫驛に着いたのは午前八時何分、愈よ鬼泪山の内懐に這入つて茸狩りを始めたのは二時間後の十時半頃であつた、夫から銘々採集に取りかゝつて、且採り且進みつ、鹿野山の登山路に出で、數年前迄茶店のあつたといふ中休みと云ふ所へ辿り着いて折しも來合せた佐貫町役場員の齎らした麥酒の握飯に飢渴を醫した何分馴れぬ山路

とて、記者等十餘名は第一の上山へと迷ひ込んで荆棘を分け小篠を踏しだきつゝ散々彷徨いたが、お蔭で獲物は多かつた、此行河野技師、千葉技手、大野技手夫妻並に佐貫町長以下役場吏員、小學校女生徒有志諸嬢の御厚意を感謝する、以下一同成金氣分に浸りつゝ河野技師から聽いた談話の要領を記して、鬼泪山を紹介しやう（一記者）

**鬼泪山** は君津郡湊町大字櫻井と、小絲村大字萩作の二部落に跨つてゐ、面積七百七十八町四反餘あるが、現在の殖林設定面積は其より二十五町歩許り少い、各種殖林面積と數量を示すと、杉が三百七十一町二反餘、百六十七万五千五百九十二本、松百五十一町四反、六十八万三千三百二十一本、樺

**七町餘** 三万六千六百五十四本合計七百十七町三反餘歩の三百二十二万八千八十三本である、又今日迄に費した經費を挙げると、明治三十九年度から大正七年度迄の合計五万五千二百九十九圓（一町歩七十圓）次の八年度は千九百九十七圓であつた、尚其収入を示すと、昨年迄は主間伐其他で僅か九百一圓に過ぎなかつたが、愈よ

**本年度** からは大正八十四年度に至る七十五年間に、各種殖林の主間伐収入其他を合して七百九十五万八千六百四十圓、一町歩當り一万九千九百四圓といふ巨額の収入を挙げることが出来る、之を同年間の支出十八万七千四百五十九圓、一町歩當り二百六十一圓に較べると、差引勘定實に七百七十七万五千八百七圓の利益で、山林の實價は二千八百万圓に及ぶと云ふこの収入の中、縣から

**國庫へ** 二分五厘納付する事となつてゐるが、如上の計算通りに行くと、此後二三十年も経つと縣の得る収益は莫大なものであらう、因に伐採期は杉六十年、扁柏七十年、赤松四十年、樺初回十二年、二回以後八年であると云ふ、

●記事（その2）

【萬朝報】大正9（1920）年9月27日（月）房総版 日刊2・3面柱（図2）

○初茸狩

東葛飾郡千代田豊四季地方は、松山一帯の初茸昨今漸く一寸位に伸び、風味頗る好く、二十六日の十五夜を當込み、初茸狩の少數團體もあつた、同所に次ぐ名産地は土村今屋新田\*1の山林で、郡役所の若手連二十餘名は來月三日茸狩を催す筈である

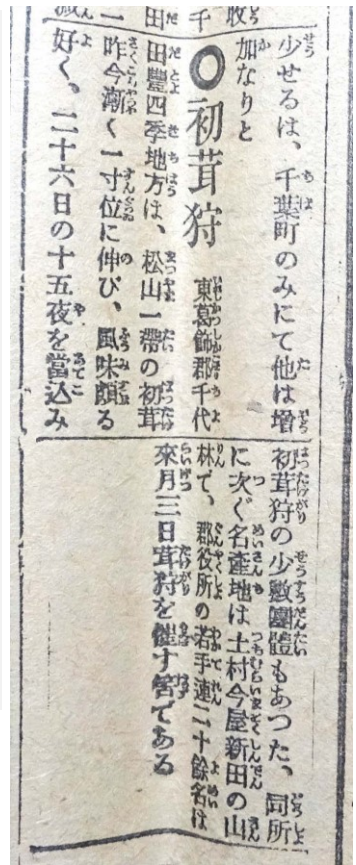


図2

●記事（その3-1）

【萬朝報】大正9（1920）年10月10日（月）房総版 日刊3面（図3-1）

□各宮御茸狩 今日三里塚牧場にて伏見、朝香、東久邇、北白川各若宮殿下には、既報の如く今日午前七時廿分兩國驛發にて、三里塚御料牧場に成らせ給ひ、新山場長の案内にて、茸狩を催させられ、午後三時六分成田驛發にて御歸京相成る由

●記事（その3-2）

【萬朝報】大正9（1920）年10月11日（月）房総版 日刊3面（図3-2）



□宮家 お茸狩 十日三里塚御料場にて  
華頂、東久邇、北白川、伏見、朝香各若宮殿  
下御八方は、随員卅餘名と共に、午前八時卅  
五分千葉驛御通過、成田驛にて御下車、其れよ  
り御料牧場の馬車に召され、三里塚なる御料  
牧場に御到着、貴賓室にて御少憩の上新山場  
長其の他の御案内にて、牧場内松山にて松茸  
狩\*2を催したまひ、尚ほ場内に散在する厩舎、  
山羊舎其の他を御見學、午後三時十五分成田  
驛發にて御歸京相成りたり、此日秋晴れの好  
日和とて、本縣警察部員其他團體の茸狩もあ  
りて、人出多く頗る賑ひたり

●記事 (その4)

【萬朝報】大正9 (1920) 年10月17日 (月)  
房総版 日刊3面 (図4)

○芝茸の中毒 一名悶死す

印旛郡遠山村山野作、安原勝三郎 (四一)  
は十五日附近の松林より採り來れる芝茸\*3を  
食したる所、夜半より苦悶し始め、手當の効  
なく死亡せり

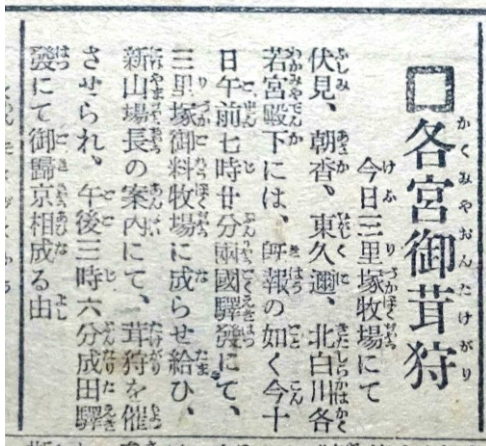


図3-1

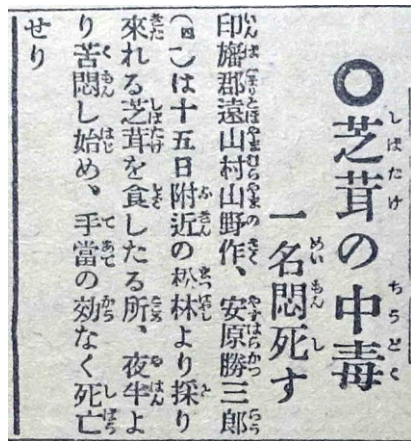


図4

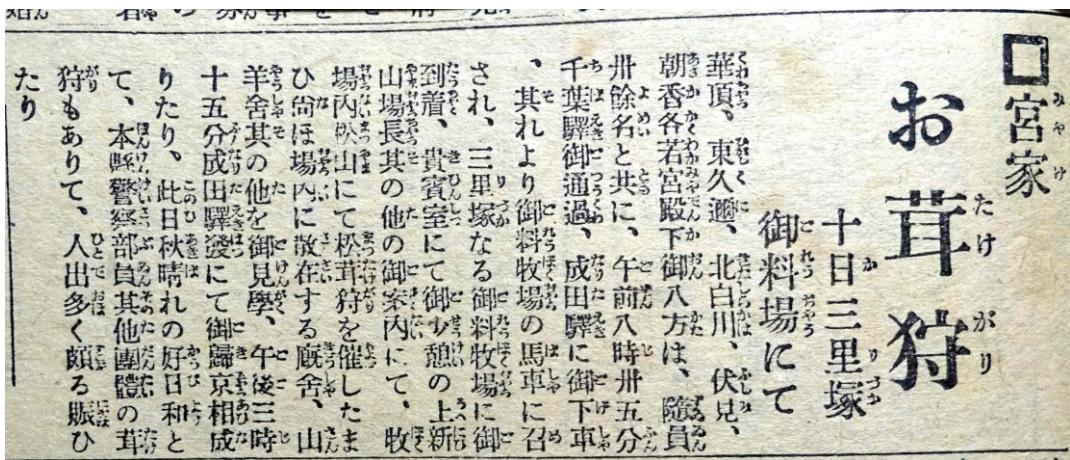


図3-2

●記事 (その5)

『成田鉄道案内』(植田啓次編, 鐵道世界社、大正5年11月15日刊行) (図5)

□茸狩地

春は野遊び、秋は山こそ興多けれ、天あく迄も高く、地あく迄も清きが中に、露分け衣すそ軽く、遠く人事をはなれて、山野自然と親むは、繁鎖日\*4に甚たしき現代人の最も必要とする所であろう。秋の遊びの楽しきは茸狩である、本線一帯の丘陵地、多くは松林を為し、初茸の発生夥だしく、到處に好適地が散在するが、就中世に知られて居るのは、成田町附近の七榮村(成田驛より南一里)一帯の松林と、多古線三里塚驛(成田驛より六哩一時間)附近一帯の松林である、毎年十月初旬から末旬迄を好季とする。

注 釈

- \*1 今屋(いまおく)新田は、今谷(いまや)新田の誤記であると思われます。
- \*2 松茸とあるのは、マツ林に生えるきのこのことと思われ、ここではハツタケをさしていると思われま。千葉県の上総、夷隅、下総、海上、香取、佐原では、ハツタケのことを「マツキノコ」とよび、海上では「マツギノコ」、「マツタケ」とも呼んでいます(川名, 1971; 腰野, 2000)。
- \*3 千葉県の下総地方、佐原地方では、アマタケのことを「シバタケ」と呼び、食用にしています(腰野, 1994, 2000)。しかしながら、傘の裏側が網目状であることから、同所に発生するチチアワタケやヌメリイグチと混同されることもあり、それらもまたシバタケとよぶこともあること、近年ではそれらが体質によっては中毒をおこすことも知られ、この中毒がアマタケによるものかどうかはわかりません。
- \*4 繁鎖日は、繁鎖日の誤植であると思われます。

文 献

- ・吹春俊光(2021a) 絵葉書や浮世絵などでたどる房総のきのこ文化 -房総で何故ハツタケが愛されているのか-. 千葉中央博研究報告15(2): 107-127.
- ・吹春俊光(2021b) 絵葉書や浮世絵などでたどる房総のきのこ文化 -房総で何故ハツタケが愛されているのか-. 千葉菌類談話会通信37: 10-36.
- ・川名興(1971) 千葉県の植物方言 第三報 下: 668.
- ・腰野文男(1994) 海岸林のキノコ盛衰記 海岸林でキノコがたくさん採れた時の話(盛その1) -鹿島のクロマツ林のキノコ(日記の一節より)-, 千葉菌類談話会通信7: 2.
- ・腰野文男(2000) 特集/千葉キノコ話③ 佐原地方のキノコ方言, 千葉菌類談話会通信16-17: 5-7.

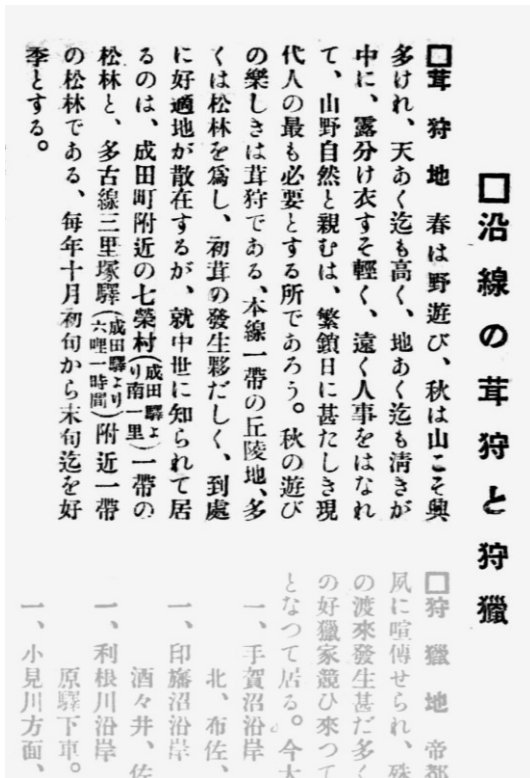


図5 『成田鉄道案内』p.13、国立国会図書デジタルコレクションより(部分、一部加工)